

[書評]

A.B. レムニョフ著 『極東のロシア： 19-20 世紀初頭にかけての権力の帝国地理学』⁽¹⁾

左 近 幸 村

1

ロシア史において帝国論が取りざたされるようになってから、10 年ほど経つ。もちろん、帝政ロシアはかねてより帝国であると認識されていたが、その多民族、多文化、多宗教の世界をいかに統合しようとしていたのかという問題は、必ずしも十分研究されてこなかった。しかしここ 10 年ほどの間、「帝国」をキーワードにしたロシアの国家統合の研究が急速な進展を見せており、同様の切り口をソ連期にも応用しようとする試みも見られる。ただロシア帝国の国家統合の研究は、ロシア人のナショナル・アイデンティティーや民族問題と結びつけて考察されることがほとんどである⁽²⁾。それと関連して全般的に、空間イメージ（ロシア史でいうところの心象地理）や言説そのものへの関心が高いようである。

上記のような研究動向は、対象となる地域の選択にも反映されており、民族問題が複雑な西部諸県や中央ユーラシアの研究の進展は目覚ましいものがある。一方、帝国論との関連から見た場合研究が進んでいない地域もあり、その 1 つにロシア極東が挙げられる。マーク・バッシンなどの例外を除いて⁽³⁾、帝国論においてロシア極東がそれほど多くの注目を集めてこなかったのは、同地にはロシア人のナショナル・アイデンティティーを脅かすような、重大な民族問題が存在しなかったことが大きいと思われる。その他、農業、商工業、人口などの点でも、ロシア極東がロシア帝国の中で重要な位置を占めていなかったと見なされてきたことも影響している。

こうした中、オムスクの研究者 A.B. レムニョフが 500 頁以上に及ぶ大作『極東のロシア：19-20 世紀初頭にかけての帝国の権力地理学』を上梓した。その構成は、以下のようになっている。

著者より

序 論 極東の文脈における帝国の主題

第 1 章 19 世紀前半の帝国の政策におけるオホーツク・カムチャツカ地域

第 2 章 ムラヴィヨフ・アムールスキーの「時代」

1 Remnev A.B. Россия Дальнего Востока. Имперская география власти XIX – начала XX веков. Омск, 2004.

2 松里公孝「ソ連崩壊後のスラブ・ユーラシア世界とロシア帝国論の隆盛」山下範久編『帝国論』講談社、2006 年、145-165 頁。

3 Mark Bassin, *Imperial Visions: Nationalist Imagination and Geographical Expansion in the Russian Far East, 1840-1865* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999).

第3章 大改革後のロシア極東：新しい統治形態の探究

第4章 新しい帝国の志向と古い統治の問題（世紀転換期）

第5章 古くて新しい極東の諸問題（1906–1917年）

結 論

著者のレムニョフはこれまで主に、帝政期ロシアのアジア部における統治機構の問題を研究してきた。著者自身は本書の冒頭で、本書は1995年と97年に発表したシベリアの行政機構に関する研究⁽⁴⁾の延長に位置するものであると述べている（3頁）。

ロシア極東の歴史そのものに関しては、ジョン・ステファンの通史⁽⁵⁾のほか、原暉之の『ウラジオストク物語』⁽⁶⁾など、これまでも優れた研究が存在している。しかしレムニョフの著書は近年の帝国論の動向を踏まえ、ロシア帝国による国家統合の試みを、ロシア極東というプリズムを通して分析してみせた点で一つの画期をなす。

そこで本評ではこの本の内容を紹介するとともに、その意義について、帝政期のロシア極東史を専攻する立場から考察してみたい。

2

「著者より」ならびに序論では、著者の問題意識とアプローチが示される。まず著者は、本書の副題にも掲げられている「権力の地理学 география власти」という独自の概念を提示する。これは本書によって初めて示された新しい概念である。著者によれば、ロシア帝国の版図の歴史を理解するには、行政区画や国境の策定など地理に関する問題への着目が不可欠である。そこでこの問題を分析するため、国家が領域の再編に関与することを「権力の地理学」と呼んで概念化している。いわば著者は領域の問題を通して、中央-地方関係や統合の過程を検証しようとしているのであり、実際、その点で著者の問題関心は一貫している。それと関連して著者は、地理的範囲の流動性を強調する。それは国内の行政区画のみならず、国境の流動性についても言えることであり、それゆえ国境の政策において内政と外交に明確な線は引けなかった（本書14、20頁）。また外との境界があいまいな国境を抱える帝国にとって、社会、法、行政の国家的な同質性をどのように築くかということが、国家統合への重要な課題となる。

レムニョフは序論において、カペレルや松里公孝などのロシア帝国論、あるいは日本でも定着した感のあるアンダーソン、ブローデル、ウォーラステインなどの議論に言及し、世界的に進展している国民国家論や帝国論の動向を取り入れようとしているが、ロシア極東そのものに焦点をあてた地域史研究の蓄積には言及していない。このような先行研究の設定の仕方にも、従来のロシア極東史研究とは違う本書の独自性が表われている⁽⁷⁾。

4 Ремнев А.В. Самодержавие и Сибирь. Административная политика первой половины XIX в. Омск, 1995; Ремнев А.В. Самодержавие и Сибирь. Административная политика второй половины XIX – начала XX веков. Омск, 1997.

5 John J. Stephan, *The Russian Far East: A History* (Stanford: Stanford University Press, 1994).

6 原暉之『ウラジオストク物語：ロシアとアジアが交わる街』三省堂、1998年。

7 本評の改稿中に公刊された論考においてレムニョフは、在ロシア極東の歴史家たちが、帝国論などの新しい歴史研究の方法論・アプローチを用いていないことを批判している。アナトーリー・

以下、第1章から第5章まで基本的に時系列に沿って、19世紀初頭から20世紀初頭までのロシア極東における統治システムの変遷が検討される。第1章の舞台となるのは、19世紀前半のオホーツク・カムチャツカ地域である。第1節「極東への熱意と危惧」では、露米会社を中心としたロシアの植民地経営策が描かれる。19世紀の前半というのは、欧米諸国が競って北太平洋に進出した時代であり、ロシアもその中の1つだった。だが露米会社の独占事業は時として、貿易発展の阻害要因になった。また防衛力強化という課題は、しばしば経済的利害と齟齬をきたした。第2節「統治上の矛盾に苦しめられるオホーツク・カムチャツカ地域」では、より具体的に統治システムの問題点が明らかにされる。現地での度重なる軍人や官吏の衝突、縄張り争い、外交も絡んだ複雑な省庁間の利害対立等々は、体系的な統治システムの確立を遅らせることとなった。何度か統治システムの改革が試みられたが成功することはなく、同地は政府上層部から見放されていくことになる。

帝政期のロシア極東史を考察しようとする場合、ロシアがアムール州や沿海州を獲得する19世紀半ばから本論をスタートさせる、という方法もあり得る。しかし本書は、19世紀前半のカムチャツカ統治をめぐる議論から考察を始めることにより、体系的な統治システムの欠如という問題が、19世紀前半から連続していることを印象付けている。こうした視点の研究は、管見の限りこれまでなかったように思われる。

第2章ではH.H.ムラヴィヨフ＝アムールスキーを中心に、ロシアのアムール方面への進出過程が検証されている。第1節は「極東での報復」というタイトルが付けられているが、ここでいう「報復」とは2つの意味を含んでいる。1つは中国に対する「報復」であり、かつて中国に「奪われた」アムールやウスリーの土地を取りもどすということである(134頁)。もう1つはヨーロッパ諸国に対する報復であり、クリミア戦争での敗北を、極東に進出することで埋めあわせるということである(150頁)。第2節「カムチャツカとアムール」で述べられているように、ムラヴィヨフは当初、アムールのみならずカムチャツカも重視していた。だが当時のロシアに、アムールとカムチャツカ、双方に力を注ぐ余裕はなかった。結局ロシアは利便性の高いアムールでの基盤強化に力を注いでいくことになる。第3節「ムラヴィヨフ＝アムールスキーの極東統治再編」では、新たに獲得した土地も含め、ロシア極東の統治体制をどのように整備すべきか、という当時の議論が検証される。ムラヴィヨフは総督の権限の強化を目指し、東シベリア総督府を分割することを提案するが、政府内の支持を得られなかった。しかしこの問題はその後約四半世紀続くことになり、次章に引きつがれていく。

第2章が扱っている時期は、言うまでもなくロシア極東史における一大転換期である。しかしここで著者は、当時の政府内の極東をめぐる議論は詳細に検討しても、領土獲得に至る清朝との具体的な交渉過程は一切検討していない。こうした研究の姿勢は、本書を特徴づけている。

第3章ではムラヴィヨフが退任して以後の、ロシア極東の統治体制をめぐる19世紀後半の議論が検討される。第1節「極東をどうするべきか」によれば、ムラヴィヨフ退任後、ロ

レムニョフ(麻田雅文、松里公孝訳)「オホーツク・カムチャツカ州から極東太守府へ：ロシア帝国の極東空間における行政ゲーム」『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』19号、2007年、1-8頁。

シアの極東への関心は全般的に低下する。少なくとも当時の議論の中で、極東に経済的意義を期待するものはほとんどなかった。第2節「極東地域の行政的領域的再建計画（1860-1870年代）」では、新総督府設立が構想されるなかで起こった、総督府（陸軍）と海軍の縄張り争いや、新総督府の領域や中心地をどこに置くかという論争が検討される。そして第3節「プリアムール総督府の設立：新しい地域政策の立案」で明らかにされるように、長い議論の末プリアムール総督府を設立させるきっかけとなったのは、中国との関係の緊張化であった。新総督府設立後、地域の問題はその地域に詳しいものに任せるということで、中央から総督や軍務知事に権限が一部委譲される。しかしこうした部分的な委譲は、広大な支配領域の中で体系的な政策決定のシステムを築くことを困難にした。このことが次章の太守府をめぐる議論の伏線になる。

第4章は19世紀末から日露戦争までを扱う。第1節「極東への路線」では、この時期の極東への進出が、どのようにイデオロギー的に正当化されていたかという問題を、C.I.O. ヴィッテなどの言説を中心に検討している。著者によれば、当時の言説には基本的に2つの方向性が認められる。1つは、ロシアと東方の文化的地政学的関係を強調するものであり、極東へ進出しキリスト教化や文明化を唱道するのは大陸国家であるロシアの使命である、というものである。もう1つはヨーロッパに向けて拡大しつつある（と認識されていた）「汎モンゴル主義」の防波堤となることを呼びかけるものであり、いわば黄禍論である。第2節「極東太守府と極東委員会」では、極東太守府設立の問題が検討される。著者は、当時ロシアが極東を統治する際、太守府のような巨大な統一的権限を持った行政府を地方に設立する必要があったとして、ベゾブラーゾフらの行動に一定の理解を示している。しかし内政と外交の壁を越え権力を集中させた行政府を作るには、従来の省庁の垣根を越えて協力しあう必要があった。それができなかつたところに、著者は太守府導入失敗の原因を見ている。つまり本書はベゾブラーゾフらの行動を単なる個人的な野心ではなく、ロシア帝国の統治構造の観点から説明している。またこれまでの研究では、ヴィッテの極東政策や極東太守府設立は、日露戦争への道という観点から検討されることが多かったが、本書のようにロシア極東の統治構造の問題そのものに着目した研究は、案外少なかったように思われる。このようにレムニョフは、世紀転換期のロシア極東の研究に新しい知見をもたらすことに成功しているが、替わりに、ロシアが満洲（中国東北地方）を事実上の支配下に置いたことの意味をほとんど検討していないことは、いささか残念である。

第3節「『放置された地域』：19世紀後半から20世紀初頭のアジア東北部とサハリン」では、第1章で扱ったオホーツク・カムチャツカ地域のその後と、サハリンの統治政策を検討している。オホーツク・カムチャツカについては、先住民がアメリカに懐柔されないようにするため、学術調査などを通してロシア側への懐柔を図るが、効率的な統治体制が確立されることはなかった。サハリンについては石炭や石油の開発が試みられるが、「流刑の島」としての性格ゆえ、これらの政策は成功を取めることができなかった⁽⁸⁾。

8 サハリンの石炭開発については、以下の文献が詳しい。天野尚樹「サハリン石炭と東北アジア海域史」左近幸村編『近代東北アジアの誕生：跨境史への試み（スラブ・ユーラシア叢書）』北海道大学出版会、2008年（近刊）。

第5章は日露戦争後から帝政崩壊までを視野に収める。第1節「極東地域をロシア人のものにする」では、アムール鉄道の敷設や自由港制度の廃止など、日露戦争後極東をめぐって活発に行われた論争が検証される。この時期の特徴は、ロシア極東領内におけるロシア人の人口比率が高まり、帝国全体の国家としての一体性が高まったことである。またそのことが、極東に関する活発な議論を喚起することになった。第2節「地域権力の統一問題：極東拓殖委員会とアムール現地総合調査」では、中央と地方や省庁間の利害を調整する極東拓殖委員会の創設や、それと関連して行われたアムール現地総合調査の編成などが取りあげられる。著者によれば委員会は一定の成果を上げたが、体系的な意志決定システムを持った政府を作るまでには至らなかった。第3節「帝国の極東統治組織における最後の変更」では、日露戦争後に行われた一連の統治体制の変更が検討されている。著者は日露戦争での敗北によりロシア帝国が軍事的経済的拡張を抑制し、政策のベクトルが内向きになったということを描いている。総じて第5章は、日露戦争の敗北が結果的にプリアムール総督府管内におけるロシアの影響力の確立を促したという、パラドックスを描いているといえる。

最後に結論において、これまでの流れがまとめられている。著者は、ロシア帝国の極東に対する政策は失敗や誤算があったにもかかわらず、最終的に成功したとみなしている。それは同時代人の極東に対する悲観的な見方を退け、極東をロシア人の土地にしてみせたからである。その遺産は、ソ連に引きつがれることになる。

なお巻末には、本書が扱った時期と領域における総督と知事の一覧表が載っており、大変参考になる。

3

次に、本書の特徴と意義を確認してみよう。著者が特に関心を寄せるのは、空間や領域の認識が、統治システムにどのように影響したかということである。その分析の過程で著者は、省庁間、中央 - 地方間の矛盾や、ロシアが極東へ進出したイデオロギ的背景を明らかにしている。史料的にも、ロシア国立歴史文書館（РГИА）やロシア国立極東歴史文書館（РГИАДВ）、ロシア国立海軍文書館（РГАВМФ）など11の文書館、44のフォンドに加え、ヴィッテ、クロボトキン、ウンテルベルゲルなど当事者の著作物、当時の定期刊行物などを極めて広範囲にわたって収集しており、実証度は高い。ただ当時の迷走する議論をそのまま丁寧に追うため、時として叙述が冗長な印象を受けることもある。

本論において、ロシア帝国による極東統治の問題点として強調されているのが、「統合された政府（объединенное правительство）」の欠如である。この問題は、原暉之が2005年の論文で「日露戦争後という国際環境のもとで、ロシア帝国は東部辺境の地域政策、中東鉄道付属地の植民地政策、中国との外交政策を一つのシステムとしての帝国政策に統合することができなかった」⁹⁾と指摘したことを思いおこせば、より一層理解しやすくなる。第5章のタイトル「古くて新しい極東の諸問題」の1つはここに由来していると考えられるだろう。

一方、原論文と読みくらべた場合、両者の視点の違いも明らかになる。それは原が「地域

9 原暉之「巨視の歴史と微視の歴史：『アムール現地総合調査叢書』（1911～1913年）を手がかりとして」『ロシア史研究』76号、2005年、62頁。

研究史学」⁽¹⁰⁾であるのに対し、レムニョフの場合は逆に「地域」を捨象したところにその特色があるということである。実際、著者は当時のロシア極東に関する言説を徹底的に収集・分析している代わりに、そうした言説が生みだされることになった社会的・国際的背景には分析の力点を置いていない。それは著者がロシア極東という地域ではなく、ロシアという1つの帝国の構造に関心を持っているからである。本書が「ロシア極東 Дальний Восток России」ではなく「極東のロシア Россия Дальнего Востока」と名付けられた理由も、ここにあると思われる。

換言すれば、本書はロシア極東史研究の進展に大きく寄与するものであるが、本書が明らかにしたことと社会的・国際的背景や実態との関連については、まだまだ研究の余地があるということである。この点について、少し考えてみよう。

著者は幾度か本書の中で、ロシアの極東統治における内政と外交の不可分性を指摘し（本書14、20、398頁）、行政システムの変更時には、常に国際環境の変化もあったことを述べている。確かにロシアの極東への関心の高まりが、国際環境の変化や外交問題に影響を受けていることは明らかである。本書で挙げられている関心のピーク（522頁）に沿って示せば、18世紀末から19世紀初頭にかけては、列強との北太平洋争奪戦。1840年代末から50年代にかけては、アヘン戦争後の列強の中国進出。70年代から80年代にかけては、イリ事件に象徴される中国との関係の緊迫化。1890年代末から1905年、1908-11年に関しては、日清・日露戦争との関連を見ることができ、これらのピークが、本書の各章と対応していることも明らかであろう。このように著者は内政と外交の関連を意識して本書を組み立てているが、すでに指摘したように、外交交渉それ自体を分析することは決してない。しかし評者としては、愛琿条約（1858年）、北京条約（1860年）、アラスカ売却（1867年）、ポーツマス条約（1905年）といった、ロシア帝国の版図が変化することになったこれらの交渉において、ロシアの空間認識がどのように現れたのか、著者の分析を見てみたかった気がする。むしろ対外交渉の場においてこそ、「権力の地理学」は如実にその姿を現すのではないだろうか。

外交交渉のみならず経済的な実態についても、検討の対象外である。著者は、ロシアが極東へ進出した動機は経済的なものよりも政治的・軍事的なものであったとしており、本書に統計の表やグラフは一切出てこない。だがたとえば、第1章に登場するカムチャツカを起点とした、ハワイも含めた太平洋貿易の実現可能性を知るには、当時の毛皮貿易の実態を押さえておく必要があるだろう⁽¹¹⁾。また19世紀末から盛んになる自由港制度の廃止をめぐる議論は、関税制度の統一という経済面から見た国家統合への動きの一環だった。実際本書の中でも議論自体は取りあげられてはいるが、貿易の実態も検討したほうが、こうした議論が出てくる社会的背景についてより深く理解することができただろう⁽¹²⁾。

10 松里公孝「地域研究史学とロシア帝国への空間的アプローチ：19世紀の大オレンブルクにおける行政区画改革」『ロシア史研究』76号、2005年、38頁。

11 北太平洋の毛皮貿易については、以下の文献を参照。木村和男『毛皮が創る世界：ハドソン湾からユーラシアへ』岩波書店、2004年；同『北太平洋の「発見」：毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』山川出版社、2007年。

12 ロシア極東の自由港制の歴史については、H.A. ベリャエヴァが優れた研究成果を発表している。*Беляева Н.А. От порто-франко к таможене. Очерк региональной истории российского протекционизма. Владивосток, 2003.*

分析の対象という点で、もう一点指摘しておかなければならないことは、著者は地域というのは歴史的に作られるものであり、可変的であるとしながらも、本書が扱う空間自体は固定的であるということである。本書でいうところの「極東」は、プリアムール総督府が最終的に支配することになった地域とほぼ一致しており、分析の対象となる言説も、もっぱらこの範囲に関するものに限られる。本書は、19世紀初頭のオホーツク・カムチャツカ地域から説きおこし、その後同地域が「放置された地域」となった後でも、その言説を丹念に追いつづける。対して、アラスカや満洲に関する言及はほとんどない。だが当時のロシア人の極東に対する空間認識はもっと流動的だったはずで、それに合わせて考察の対象も、もう少し柔軟に変えてもよかったのではないだろうか。

ただし評者は、以上指摘した点を本書の重大な欠陥であるとは考えていない。むしろ著者の一貫した姿勢から得られたものを重視するべきであり、漏れおちたものについては今後の課題として、後に続く者が補っていけばよい。地域史研究とレムニョフのような帝国論をいかに組みあわせるかについては、既出の原論文が参考になるだろう⁽¹³⁾。

著者は本書の執筆後、「権力の地理学」の概念を使ってステップ総督府創設を分析する論文を発表している⁽¹⁴⁾。この論文も本書と同じ問題意識に貫かれており、著者の問題意識を知るにはこちらの論文から入るという手もあるだろう。著者の意欲的な活動が、ロシアのアジア部に関する研究を大きく進展させることは間違いなく、しかも著者の問題意識が一地域にとどまらないものである以上、ロシア史研究者は今後ともその活動から目を離すわけにはいかなさそうである。

13 また評者の考える今後のロシア極東史研究の可能性については、以下の文献も参考。左近幸村「東北アジアから見える世界」左近編『近代東北アジアの誕生』。

14 Ремнев А.В. Степное генерал-губернаторство в имперской географии власти // Азиатская Россия: люди и структуры империи: сборник научных статей. К 50-летию со дня рождения профессора А.В. Ремнева / Под ред. Н.Г. Суворовой. Омск, 2005. С. 163–221.